

渡辺清の『海の城 海軍少年兵の手記』と

『戦艦武蔵の最期』を読む

松岡 勲

『海の城 海軍少年兵の手記』

渡辺清の代表作『海の城 海軍少年兵の手記』『戦艦武蔵の最後』『私の天皇観』『砕かれた神 ある復員兵の手記』をすでに読んでいて、私のホームページに感想を掲載している。渡辺清は一九七〇年から日本戦没学生記念会（「わだつみ会」）の事務局長を務め、一九八一年に五六歳で亡くなった。

最近、角川新書でそのうちの『海の城』『戦艦武蔵の最後』が再版された。どちらも朝日選書版での鶴見俊輔氏の深い含蓄のある解説が再録されているが、新しく福岡良明氏（前者の本）及び一ノ瀬俊也氏（後者の本）の解説が掲載されている。どちらも再読した。

まず『海の城 海軍少年兵の手記』を紹介する。新しい解説は福岡良明『「天皇への問い」の起源 『海上の城塞』の閉鎖性と暴力』で、現代からの視点で読み直したものだ。あらためて本文を読み直して強く感じたことは、巨大な戦艦のなかで（陸軍の「内務班」と同様の）私的制裁が繰り返されることのすさまじさだ。それも海上に浮かぶ戦艦の閉鎖性、閉じ込められた空間の中で振

るわれる暴力の恐怖だ。

一八歳の主人公北野信次（著者渡辺清をモデルとしている）は、トラック島基地で、戦艦「播磨」（このモデルは「武蔵」）に乗りこむ。同期の上等水兵六人の若い兵隊としての共同の主人公の視点から戦闘に入るまでの軍艦の日常生活が描かれる。分隊内では制裁が熾烈を極め、その恐怖、肉体的・精神的苦痛が描かれる。この小説で繰り返し出てくるのは「甲板行列」である。分隊の下士官、兵長らが若い兵隊に、差し渡し三尺ぐらいの櫓の棍棒（これを「軍人精神注入棒」と言った）、そのほか木刀、グランジパイプ（消防蛇管の筒先）、チェーン、ストッパー（わざと海水につけて固くした太い麻縄）などを使って行われる暴力である。（「甲板整列というのは、だからいつてみれば軍艦の精神であり、教義であり、紀律であり、矜持であり、意志であり、感情であり、要するに軍艦を内側から守るための一切である。」）この中で江南一等水兵は殴り殺され、山岸上等水兵は休暇帰省中に自殺して艦に戻らなかった。このほかにさまざまな制裁（「不動の姿勢、敬礼、整列、かけ足、罵倒、殴打、うぐいすの谷渡り、食卓のおみこし、ミンミン蟬、電気風呂など卑劣きわまる罰直だ。」）が日常化していたのが海軍の実態であった。とても陸軍より海軍が「近代的」とは思われない。

最後の場面では、山岸上等水兵の自殺にからんでの制裁で我慢の極限を越えた北野はついに上官への反抗にいたる。この場面には、実際にはできなかった「抵抗」への著者の歯噛みする思いがこめられていると思った。「あとがき」には、「私は十六歳のとき、自ら志願して戦争に参加したひとりであるが、それだけに戦後はその無知と屈辱と罪責にさいなまれ、（中略）戦争は私にとって

何だったのか、どんな傷痕を残したのか：私はもう一度、過去の自分を赤裸々に再現してみること、主體的にとらえなおしてみようと思った。」とある。新書版で四五八ページに及ぶ力作だ。

以前に読んだ時には、戦時に行われた「暴力」を単なるリアリティだけで読んだが、あらためて小説として読み直すと、戦時に戦艦の中で生きた若き少年兵の心の葛藤、煩悶等が強く描かれていて、また若者たちに死をもたらした「天皇制」への根源的批判のある、実にいい作品だった。

『戦艦武蔵の最期』

次に渡辺清著『戦艦武蔵の最後』を紹介する。戦艦武蔵はブルーネイ湾を出港してまもなく、米軍機の爆撃にあつて、船団のうち旗艦の愛宕他二艦を撃沈、大破された。その後、米軍の制空圏内に入り、激しい攻撃に会う。その後、武蔵の沈没までの姿を描く。読むのが怖く、辛くなった。大岡昇平の『レイテ戦記』が「レイテ戦の戦闘について、私が事実と判断したものを出来るだけ詳しく書く」全体小説で、一種の抽象画を連想させるとするならば、渡辺清の『戦艦武蔵の最期』は彼の同僚の最後の瞬間を「肉と血」とで描いた具象画の世界だった。ほんとうに読み進めるのが怖かった。「本書は日本海軍の戦艦武蔵が一九四四年十月のレイテ沖海戦で米軍機の雷爆撃を一手に引き受けるかたちで撃沈される様を、上は戦艦最上部の防空指揮所で指揮を執る艦長猪口敏平少将、下は甲板で米軍機の執拗な銃爆撃にさらされる著者渡辺たちの対空機銃員や船底の汽罐室に閉じ込められてむなしく溺死していく

機関兵、そして沈みゆく武蔵に置き去りにされ絶叫のする負傷兵などの視点で描いている。〔解説〕一ノ瀬俊也)

読み終わって特に印象に残ったのは、一九歳の海軍志願兵だった渡辺が同年兵の無残な死の瞬間を描く時、その彼らの社会的出身とその生活背景を詳細に描きこみ、その死の無念さに思いをはせていることであつた。いくつかそれを上げてみると、「堀川は福島の阿武隈川沿いの農家の四男だが、彼の話によると、まとめて七反ほどの田圃や畠も全部が小作で、うちの暮らしむきはひどかつたようだ。(中略)これが全部うちの米だったらどんなにいいだろうと思つてね：：やつと秋になつて米を俵に入れてもそんなわけでしょう。あとうちの食いぶちはいくらも残らないんですよ。」(彼(星野)は志願兵ならたいして志願する砲術学校や水雷学校の試験を一度も受けなかつた。だからおれたち同年兵のなかでも無章兵は彼だけだつた。学校へいけば進級が早いかわりに勤務年限がのびる。彼はそれを避けていたのである。」「おれはもう海軍にやなんの未練もないんだから、志願兵の五年の満期がきたら早くうちへ帰るんだ。みんな待つてゐるからなあ、とくにばあさんがよ。おふくろはおれを生んだあと、肺炎カタルになつて、ずいぶん寝こんでいたもんで、その間おれはばあさんの手で育てられたんだ。だからばあさんは、おれが可愛くて、志願したときも泣いて反対したつけ：：。」「おれが武蔵に転勤になつたとき、分隊の同年兵は、星野、杉本、稲葉、石巻、山口のおれと六人だつた。そのうち山口は去年、休暇でくにもとに帰つて自殺してしまつたが、それからおれたち五人はずっと一緒だつた。(中略)だが、石巻も死んだとなれば、これで生き残つたのはおれ一人だ。(中略)みんなが死んで、自分だけがおめおめと生き残つたこと

に納得がいけないのだ。おれは死ぬべきであった。死ななければいけなかったと思う。」死者を悼む思いとこの「生き残りの呵責と羞恥」が渡辺の戦後の生き方の基底にあったと思う。（鶴見俊輔の解説「鑑底の牡蠣殻」の分析は的確だ。）

私はこれを書いている間も何度かいやな戦場の夢にうなされた。ある時は烈しい火焰と水柱をあび、血まみれの死体にふれ、母親を呼んでいる少年兵の金切り声をきき、ときにはひっくり返った艦底を総毛だつて駆けずりまわっている自分の姿をそこに見た。そんなとき私はきまつてわき腹にじつとり寝汗をかいて眼をさまし、息をのんで床に起きなおつては、あわてて部屋のなかを見まわしたりした。『ここは艦じゃない、おれはもうとくに陸に上がっているんだ』と納得してみても、それからはもう寝つけない。私は夜、床につくのが恐ろしかった。そしてそういう夜が幾晩もつづいた。

本書はどのような鬱屈した内的葛藤の中でようやくまとめ上げたものである。（「あとがき」）

おわりに

「空母、飛行機の前には歯が立たなかった」戦艦大和・武蔵に代表される「大艦巨砲主義」の政策の間違いが多くの将兵の犠牲を生んだ。（戦艦武蔵は艦長以下千数百名の乗員の犠牲）当時その政策を決定した政府・海軍の責任者はその失敗の責任を取らなかった。戦後も同様に福島原発事故に代表されように同じ構造を

持ったままの日本の政治が続いてきた。最近の旧統一教会問題、自民党の裏金問題などでも変わらない。そのことが今も問われている。

なおこの書評は『わだつみのこえ』（第一六一号、日本戦没学生記念発行）に掲載したものを一部補正した。

